

電磁波リスクどう回避



スマートフォンや携帯電話利用が低年齢化する中、電磁波による子どもの健康への影響を気にする親が増えている。どうなりリスクが懸念され、どのようにリスクを減らせばよいだろうか。

携帯使用、子どもへの影響は？

スマートフォンや携帯電話の電磁波は電子レンジと同じ高周波のマイクロ波。電子レンジと比べれば十分の1程度のエネルギー量だが、体に密着して使用するので影響を受けやすいのが特徴だ。

2011年に国際がん研究機関(IARC)が、携帯電話から出る電磁波に「発がん性の可能性がある」との評価を下した。国内でも大人対象の調査結果はあるが、子どもに対する影響は東京女子医科大学が調査中。携帯電話とがんの因果関係は証明が難しく、判定はグレース1といっている現状だ。

電磁波問題に取り組むNPO法人市民科学研究室の上田昌文代表は、「子どもは神経系や免疫系が未発達で、大人と比べ影響を受けやすいのに注意

が必要」と訴える。

子どもは頭蓋骨が薄いため脳組織の伝導性が高く、頭部での高周波吸収率が高い。例えば、マイクロ波を「大人の3.3倍吸収する」「吸収領域が大人の2倍かそれ以上」などの指摘もある。

このように端末とつきあえばよいが、対策としては、脳への影響が大きくなる通話は控え、メールでやりとりをする。イヤホンマイクを使い頭部から端末を離して使用するのもひとつの方法だ。

どんなときに電磁波が強くなるか親が知っておくことも大切。例えば、送受信の瞬間に最大出力となるので、番号入力後は相手が出るまで端末に

子どもはできるだけメールでのやりとりを

頭を近づけない。まだ、ビルの谷間や山間部などは電波が届きにくい状況では強い電磁波を発するため、電波が届きやすいところでは直す。

スマートフォンにいても電源を入れている限り、端末と基地局は常に通信をしている。枕元に置いていたりジャケットやバッグのポケットに入れるのは避けた方がよいだろう。また、購入時にSAR値をチェックする。SAR値とは人体の組織が受ける熱量の目安で、機種によって数値が異なる。日本の許容量は2.0ワット/キログラムで世界的には緩めの規制だが、数値の低いものを選ぶほうが安全だ。

仕事や生活に切り離せなくなった端末だが、「休日を利用して端末を使わない日を大人自ら作り、子どもに手本を示すことから始めてみたい」と上田さんは提案している。

